

談話

人形劇と、人生と

人形劇団ブランコ 寺尾邦宏

人形劇を始めたきっかけ

高校に入学した頃です。学校の階段の裏側に無造作に人形たちが詰め込まれた段ボール箱が目に入りました。人形に手を入れると生きてるように動くのが面白く、これが人形劇との最初の出会でした。さっそく入部して色々なところで子どもたちに人形劇を楽しんで貰いました。

卒業して4年程過ぎてから、後輩が声をかけてくれて、1964年に「ブランコ」を結成しました。劇団名は世界中の子どもたちが知っている遊具「ブランコ」から名付けました。

練習場所は豊平の実家を建て直すときに、離れの十畳間を大工さんに解体してもらって、仲間みんなで組み立て直しました。時間に制限される事なく好きなだけ使える場所に、札幌にみえたプロの方も顔を出してくれて話が弾みました。

こぐま座ができるまでは、劇団が児童会館に行って、子どもたちに会う機会が一番多かったと思います。デパートの客寄せのために、屋上で子どものための人形劇をやることもありました。

公演のとき、荷物はみんなで担いで持って行きました。タクシーは荷物を載せる車でないって断られるんです。それで運転免許取得に反対していた母に隠れて、こっそり免許を取りました。それから車はずっと8人乗りの箱型の車で、ナンバーはブランコ創立年の1964でした。

ブランコの人形は首の部分の人差し指と中指で掴み、

人形の手は親指と小指であやつる片手使いの手袋人形

東北の人形劇フェスティバルに参加した時に、伝統芸能の早変わり人形を見たんです。踊ってる最中、パッと顔が変わっている。次の頭(かしら)を、操人がくわえていて、頭をどンドン変えるんです。それを見て「これだ!」と思いました。その東北の人形の胴串は長いんですけど、丸くて短いつまみにして二本の指でつかむように工夫しました。人形は全部自分で作ります。ブランコ創立時は10名近くのメンバーがいましたが、平成からは夫婦2人で活動しています。

人形劇の師匠

私が続けることができたのは、土方浩平さんという人形劇人がいらっしゃるからです。もともと演劇畑の方ですが、長野県の諏訪市で、一人で人形劇を続けていました。路地裏で紙芝居をやるように諏訪市の子どもたちに人形劇を見せていました。テレビ番組の子ども催しで札幌に来た時、その方を知って、あまりにも純粋に子どもに見せる人形劇をされているところに惚れて、何とかそこに近づきたいという気持ちでやってきました。人形劇を続けていく精神や生

50周年を迎えるこぐま座を記念して開催した座談会(2025年11月27日)にも参加された寺尾さんの人形劇人生について、お話を伺いました(2026年1月18日)。

き方は、この方を手本にしてきました。

腹話術「あっちゃんとおそぼう」

あっちゃんはブランコ誕生の翌年に生まれたので、去年還暦でした。会社の同期の結婚式に何かやってくれと言われて、腹話術だったら一人でもできると思い、人形作りからはじめました。障がいを持っている子どもでも「あっ」っていう声は出るので、「あっちゃん」という名前はよかったです。

2年前に腰を痛み、左肩の腱が切れてしまい、人形劇は出来なくなりました。あっちゃんだけは、子どもたちに遊んでもらえるかなと思って続けています。子どもたちからももらった手紙は壁に貼ったり、宝の箱に入れてあります。どう読むのかわからない手紙もお母さんが翻訳して読めるようにしてくれるんです。

こぐま座と50年

こぐま座ができてからは、子どもたちが入場料金を払って観に来てくれることにも感激しました。こぐま座が完成した時は、嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。板垣市長さんにお礼の手紙を書いて出しました。あのときの気持ちは今でも忘れません。仲間が札幌に来た時も中島公園へ行って、「これが公立で最初にできた、子どものために作ってくれた人形劇場『こぐま座』だよ」と自慢しています。

こぐま座は本当にありがたくて大事に大事にしてきました。公演が終わった後の劇場掃除、下駄箱を雑巾で拭いたりすることは、当然やらなければならないと思ってやってきました。

札幌で人形劇をやる私たちは本当に恵まれていると思います。ただ恵まれすぎてありがたみを忘れてるような使い方だけは気を付けたいと思っています。劇場も玄関からステージからすべて自分たちの宝物のように大事にして、これからも末永く使えるようにして、後々出てくる劇団にも十分に活躍していただきたいと思っています。

こぐま座があるから、自分の好きな人形劇を永く続けてこれたと思っています。今、人形劇をされている若い方たちも、思いっきり作ってほしいです。こぐま座の存在をもっと多くの人達に知ってもらいたいと願っています。

寺尾 邦宏 (てらおくにひろ)

札幌東高校人形劇研究部の卒業生が立ち上げた「人形劇団ブランコ」代表を発足当時から務め、今日に至る。代表作は、人形劇『このつぎなめに』、腹話術『あっちゃんとおそぼう』。現在も多数のファンを魅了し続ける。



みんなで楽しめる場ってどんな場所？

【第5回】最終回 ——いろいろな視点から考えてみよう！

1回～4回目まで、多様な立場からインクルーシブな場づくりに関わる5名の方にインタビューを行い、あらためて「誰もが楽しめる場とはどんな場所か」を考えました。

デフ・パペットシアター・ひとみの活動は、まさにその問いと向き合い続けてきた歴史そのものだと感じます。言語も文化も異なる人同士が、同じ目線で舞台をつくらうとしてきた試みは、当初こそ手探りだったものの、その過程で生まれた対話や発見が団体内や観客に新たな気づきをもたらし、「違いがあってもいい」という感覚が広がっていったことが伝わってきました。

この取り組みの根底にあるのは、違いを「なくす」のではなく、「そのまま」表現しようという姿勢です。文化のズレや感覚の違いを隠さないことで、観る側も自分とは異なる誰かの世界に触れられるようになります。そして、その「ズレ」こそが観客にとって新しい視点や気づきの源となり、演劇は五感を通して他者の存在に触れ、ひとつひとつの瞬間を共有することが出来る力があるのだと実感させてくれました。「ありのまま」を尊重する姿勢は、地域で障害のある人と共に生きる場を育ててきたNPO法人ぶかぶかの活動にも通じています。指導や

支援によって人を型にはめるのではなく、その人らしい表現が自然に立ち上がる瞬間を大切にすることで、思いがけないドラマが生まれます。そうした姿を地域へ発信することで、「一緒に生きてほうが社会は豊かになる」という気づきが少しずつ広がり、人と人との関係もよりフラットなものへと変化していきました。伊藤いづみさんのお話からは、芸術が人の心をほぐす力を持っていることが伝わってきました。芸術との関わりの中で、家族以外の誰かが子どもの表現を「素敵だね」と受け止めてくれた瞬間、長く抱えていた思いが解放されたこと。また、舞台に「出演する」という経験が、これまで観る側だった家族の心をも解放してくれたこと。言葉でのやりとりがうまくいかない場面でも、互いを尊重しながら同じ目標へ進む姿は、「支援する／される」という固定化された関係を超え、芸術だからこそ生まれる豊かな関係性を形づくっていました。

皆さんのお話を伺って感じたのは、インクルーシブな場とは特別な設備や制度によってつくられるものではなく、「その人がそのままいていい」と感じられる関係性によって育まれるものだという事です。芸術は、違いそのものを

を豊かさに変える力を持っています。作品の内側にとどまらず、終演後の対話や地域との関わり、家族の参加といった「外側の場」まで含めて、芸術は立ち上がっていくのだと感じました。

誰もが芸術を楽しめる社会をつくるために大切なのは、地域の人々がそのプロセスに主体的に関わり、共につくる場を育てていくことだと思います。地域の営みと芸術が交わりながら丁寧に積み重ねられたプロセスが、そのまま文化となり、社会を変えていく力になります。「あなたはあなたのままでいい」と互いに言い合える社会の実現に向けて、芸術は重要な役割を果たしています。みんなで創り上げていくことこそが、その大きな一歩なのだと思います。今も確かに存在するその場所を一つ一つつなぎ、それが当たり前にあるものにしていきたいですね。

正木 千尋 (まさきちひろ)



人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」にて7年間、企画制作を担当。その後、仙台に拠点を移し、NPO法人エイブル・アート・ジャパン主催「広場の人形劇」など、障がいのある方々と舞台をつくる事業にコーディネーターとして携わる。現在は一般社団法人パップスの共同代表として、「ひとりに寄り添う人形劇（観客は一人）」の開発を行い、誰もが芸術を楽しめる場づくりを目指して活動している。

ほん

MA・SO・BO
本 シェルジュ
HON-CIERGE

本のご案内「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ⑫

岸 春江 (きはるえ)

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士・絵本セラピスト® / 自宅に約3000冊の絵本を所有。主宰の「ファンタジアパル」は2019年、北海道読書推進運動協議会「優良読書グループ 奨励賞」受賞



「やまおやじ」

きくちちき / 西東社

「でてきた、でてきた、やまおやじ〜♪」北海道民にお馴染みのあのCMが、一冊の絵本になりました。描いたのは同郷の作家・きくちちきさん。墨の線からは今描いたばかりのような息遣いが聞こえ、雪の描写には思わず触れたいくなるほどの瑞々しい色艶が宿っています。編集から印刷まで「チーム北海道」で製作された本作は、紙質からニス加工に至るまで、とことんこだわり抜かれた唯一無二の存在感。そこには子どもの成長を見守る親の眼差しと、温かな友情の物語が詰まっています。「百聞は一見に如かず」。名物菓子のように長く深く愛されるべき、本づくりの情熱が宿る一冊です。ぜひ、その手触りとともに楽しんでみてください。



「おねぼうさんはだあれ？」

片山玲子 文 / あずみ虫 絵 / Gakken

森に春がきました。うさぎのミミナちゃんは、冬ごもり中の友達を「とんとんとん」と起こしに出かけます。枕元にそっと置かれた春の草花。その香りに誘われて、一人、また一人と目を覚まして集まってきます。特筆すべきは、登場する生き物たちの柔らかな表情です。実はこれ、アルミ板をカットして描かれているというから驚きです。金属から生まれたとは思えない温かな色彩と奥行きは、まさに春の光そのもの。そんな光の中で出会うミミナちゃんたちの愛らしさに、私の心は一瞬で掴まれてしまいました。パステル調の優しい色合いの中に「かわいい！」がぎゅっと詰まった、春の笑顔呼び込む一冊です。



札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397

お問い合わせ 札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886

お申し込み

〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号

(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。

